

インターネットを用いた三宗教間対話の実践 ユダヤ教・キリスト教・イスラームの思想における平和と和解のために

ソロモン・シンメル (Solomon Schimmel)

1

はじめに、この私を同志社大学に客員教員としてお招き下さった森教授と小原教授、並びに神学部及び神学研究科の教員の皆様と一神教学際研究センター (CISMOR) に深く感謝いたします。短い期間ではありますが、同志社大学と京都に滞在することは、私にとって教育的な意味でも啓発され、かつ喜ばしいことであります。また、CISMORの事務局スタッフの方々も、寛容な心で忍耐強く私をサポートをしてくださり、非常に感謝しております。

さて、今回の発表は3つのセクションに分けて進めます。

1. はじめに、インターネットを通じて、宗教間対話と宗教間の和解におけるユダヤ教、キリスト教、イスラームの三宗教間対話を発展させることを提案します。
2. 次に、三宗教間対話において議論可能な概念の一例としてユダヤ教とイスラームにおける懺悔 (*teshuva/tawba*) の重要性について言及します。
3. 最後に、私が教鞭をとっているヘブライ・カレッジ修士課程のオンライン講義の際に使用している教育プログラムソフトウェアのデモンストレーションをとおして、それが三宗教間対話を促進する媒体にもなりうるものであることを証明したいと思います。三宗教間対話を発展させる上で、そのプログラムは容易に適応されることが可能であり、私が教えているオンライン授業の中のユダヤ教倫理を断片的事例として取り上げて説明します。

2

私は現在、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムが平和、和解、そして相互の信仰の尊重という目的のためにインターネットを通じて宗教間対話を発展させるという研究をしています。本研究は様々な機会と目的意識を提供します。インターネットの技術は

その機会を提供するものです。研究の目的とするところはその適切な概念化、「三宗教間対話」の達成、そしてそのための教育的手法です。まずはインターネットによってもたらされる教育学的機会について話したいと思います。

インターネットは様々な国々に居住する個人に、それが教師と学生という関係であれ、相互に文書、オーディオ、グラフィックまたはビデオモードなどを使用してコミュニケーションを図ることを可能にします。それは生活領域においても非同期的領域においても使用されます。加えて、ウェブサイトはヘブライ語聖書、新約聖書、クルアーン、そして3つの一神教における多くの宗教書物を、伝統的な意味でも非学術の意味でも、多くの人々が容易にアクセスできるようにしてくれます。このような作業によって、対照と比較という方法で3つの信仰に共観的視点を見出すことが可能になります。例えば3つの聖典文書の中で、アブラハムと神との契約がどのように描写されているのかを対照または比較するために、学生が創世記15章と17章、ローマ人への手紙4章、ガラテア人への手紙3章、クルアーン2章と22章をウェブ上の画面に取り上げます。学生たちは、3つの宗教的聖典の基盤となる文書がどれほど推敲されたかを検証するために中世のユダヤ教、キリスト教、イスラームの聖典注釈にインターネットを通じて知ることができるわけです。また、学生たちは教員が音声ファイルを使用して聖典文書を分析するのを聞くこともできます。学生たちはその文書とそれが含有する意味、またはそれが様々な信仰を表していることに関する質問を教員に投げかけるのです。この私のオンライン授業では、学生たちはそれぞれムスリム、キリスト教徒、ユダヤ教徒と3者のグループを組み、それぞれの宗教的文書とその注解を互いに分析し、諸文書が何を語るのか、何を意味するのか、その意味が含有するものは何か、そしてその諸文書がどのような問題をもたらすのかを話し合います。それぞれの異なった3つの宗教に従事する学生の各グループは教員から質問を与えられ、それに対してオンライン授業全てのグループに応答します。学生たちが使用する宗教的諸文書はウェブサイトに掲載されているため、いつでも再学習が可能です。

また、インターネットを通じてのキリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒による平和、和解、そして相互理解を目的とした「三宗教間対話」を発展させる上での課題は、5つの分野に分類されます：

- 1) 教育的目的を定義すること
- 2) カリキュラム内容を明確に規定すること
- 3) 講師及び外部発表者の募集
- 4) 学生の選定
- 5) 多様な教育手法の調整

インターネットはユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムの声をひとつの「仮想の屋根」の下に集める道程を提供し、インターネットにアクセスする学生と世界中の宗教学者の対話を可能にさせます。「三宗教間対話」のひとつの目的は、学生たちに異宗教間における多元的意見に触れさせるだけでなく、例えばカトリック教徒とプロテスタント、スンナ派とシーア派、正統派ユダヤ教徒と改革派ユダヤ教徒のように、ひとつの宗教の内側にある多元的意見を考察させることでもあります。

まず「三宗教間対話」の教育的目的とは何であるのか。我がオンライン授業では少なくとも2つの目的を達成しなければなりません。

1. オンライン・コースの参加者に、3つの信仰の関連性をしばしば特徴づける紛争、激しい敵意、憎悪を引き起こすイデオロギー的または神学的な根源をより理解させることであります。しかしそれは必ずしもイデオロギーと神学のみが紛争や憎悪の引き金になっていたわけではなく、歴史、経済、政治などもまたその要因でありました。ただこの「三宗教間対話」は宗教的思想、宗教的態度、宗教的価値観の世界、特に宗教の文書的諸伝統とその解釈から焦点を当てます。それゆえ例えば、イスラエルの人々は神と特別な関係を築くことによって神に選ばれたという聖書的概念の起源、意味、そしてその意味が含有するものを探ることを目的とするのです。契約された国家の聖書的概念は、古代イスラエル人またはその後のユダヤ教徒の、異教徒、キリスト教徒、ムスリムに対する態度と行動にどのような影響を与えたのでしょうか。キリスト教徒が救済というものはキリストを通じてのみ行われ、教会が建ち、ユダヤ教徒とムスリムはイエスの神性を認めないがために異教徒と決めつけられるというような考えは、ユダヤ教徒とムスリムに対するキリスト教徒の態度と行動にどのような影響を与えたのでしょうか。イスラームがムハンマドとクルアーンを信奉するウンマと低俗なズィンミーであるキリスト教徒やユダヤ教徒を区別すること、またはクルアーンが神の完全で最後の啓示であるという信仰がユダヤ教徒、キリスト教徒、そして多神教信徒たちに対するムスリムの態度と行動にどのような影響を与えたのでしょうか。このようなそれぞれの宗教的概念はどのように多様に解釈され、そしてどのように宗教的他者に対してより厳しい意味合いをもってきたのでしょうか。それぞれの宗教的信仰の中で尊敬され、崇拜された指導者たちは、彼等自身で聖典や宗教的伝統を解釈し、その解釈が宗教的他者に対して憎悪や暴力を生み出してきました。

2. 「三宗教間対話」の教育的目的は、それぞれ3つの宗教における、「他者」に対する明示的にも暗示的にも肯定的な態度や行動を教える概念を考察することにあります。例を挙げれば、ラビ教義のユダヤ教は「ノアの七戒 (Seven Noahide Laws)」と「諸国民の義人 (Righteous of the Nations)」という概念を進展させ、ある学者たちによれば、そ

の概念とは倫理的、道徳的に正しい人生を歩む人々に与えられた救済の普遍性であるというのです。新約聖書に出てくる親切なサマリア人のたとえ話は、例えその親切なサマリア人たちがキリストに信仰をおいてなくても思いやりと哀れみをもって隣人を愛する人を神は愛すると解釈され多くのキリスト教徒に理解されています。イスラームはアッラーの慈悲と哀れみが、彼が創造した全ての被造物に及ぶと教えています。これら3つの信仰は、我々人間が神を模範するようにと説き、神はしばしば慈悲深く、哀れみに満ち、寛大で、時には罪人にさえも情け深くあると描写され、そのような神的性質を模範することが我々に義務として重くのしかかると教えます。

マーク・ゴピン (Mark Gopin) は宗教間紛争における和解と平和的努力に貢献することが可能な宗教的諸価値観について列挙しています。¹⁾「三宗教間対話」に従事する人々は以下の8つの価値観に従って、それぞれの宗教的伝統から宗教的文書を考察します：

- 1) 共感 たとえ相手が自分の敵でも、他の痛みと苦しみを経験できる能力。
- 2) 非暴力 暴力的行動に訴えるよりも、非暴力で争いを解決するという選択。
- 3) 生命の尊厳 全ての人間は神の被造物であり、神は人間に本質的な神聖さと尊厳を与えたという信仰。
- 4) 謙遜と自己批判 自らの限界と不完全性に着目することにより、人はより他者を受け入れやすくなり寛容になれるという視点。
- 5) 懺悔 罪人が自らの非行を認め、それに対し自責の念を表明し、傷つけた人々に対して謝罪し、可能ならば経済的または心理的償いをする。そして被害者に対して赦しを請うこと。
- 6) 赦し 自分が被害を被ったとき、攻撃または害した相手を赦すこと。²⁾
- 7) 驕りや怒り、嫉妬や強欲といった憎悪や暴力を助長するような感情を抑制する宗教的規律。人々は謙遜や寛容、満足や節制という宗教的価値観によって成長し、そしてより他者を認めるような平和主義的で社会適合的な傾向。³⁾
- 8) メシア的終末論と想像 ゴピンの言葉を借りれば、「3つ全ての一神教は紛争の解決に対して重大な貢献をしている...人間の社会秩序のための新しい可能性の間に、より正しい社会のヴィジョンを持つ。」

上記に挙げた諸価値観の幾つかは決して普遍的なものではなく、ある特定の信仰共同体にのみ向けられたものであることは明白です。しかしより拡大的に解釈することによって、普遍的に適應される価値観もあります。それは例えば他宗教の信徒のみならず、罪人や異教徒にも適應される価値観であります。教育する上で、このような社会適合的または平和主義的価値観、和解、二元論的倫理というような相互の信仰を認め合うことを表明する文書を学ぶのです。しかしながら、「三宗教間対話」のひとつの目的は、なぜ

二元論的倫理がそれぞれの宗教の中で発展したのか、そして上記の宗教的諸価値観がひとつの宗教的伝統の内側から、再解釈と文脈化によってどのように普遍化されるのかを考慮することであります。

私も参加しているヘブライ・カレッジのグループは、「三宗教間対話」を発展させるためにそれぞれの宗教における価値論的基盤を絡ませて論じています。「三宗教間対話」の目的の一つは、絶対的な宗教的真理に依拠するそれぞれの宗教の主張を徹底的に批判することであるべきなのではないでしょうか。もし全ての信徒が、彼等独自の信仰と宗教的信条を客観的に認知することができるのなら、相互の議論は結果的に偉大なる宗教的寛容性、宗教的多元主義に対する肯定的態度、そしてそれぞれの宗教における崇高なる倫理的価値観の普遍化をもたらすでしょう。それとも「三宗教間対話」は、啓示された神聖なる真理の使者または伝達者としての特権的立場をもつそれぞれの宗教的信仰が訴える基本的な神学的主張に挑戦すべきなのではないでしょうか。むしろ神聖なる真理を特権的なものとして維持しつづけるそれぞれの宗教的信仰に見られる寛容、平和、和解、そして他者、他の宗教、人類全てに対する愛について教えるべきなのではないでしょうか。私が個人的に選択するならば、神学的基盤よりも実存的基盤に焦点を当てる後者のアプローチを選びます。私は、「三宗教間対話」の中心となる教育的目的は、それぞれの宗教を信仰する人々が共同研究することによって、寛容性、思いやり、和解を育むことであると考えます。価値観に基づいた信条を批判することは、「三宗教間対話」に多くの人々、特に参加する必要性がある人々や、対話を完全に避けるよりも知識欲を持って対話に参加する人々の動機を低下させてしまうでしょう。独自の、そして他の宗教的伝統を熟考できる人々を集め、彼等の中にある本質的に存在する信仰の中核を批判することなく、自らの宗教的教義または理解において幾つかの道徳的・倫理的欠陥があり、それを修正する必要があると認める動機づけになるだけでも十分な成果と言えます。

「三宗教間対話」とは誰によって進められるべきなのではないでしょうか。私は以下の3種の参加者たちが優先的に対話を進めるべきであると感じています。

- 1) 相互の宗教的伝統の差異に詳しくないが、宗教間理解と相互関係の改善に関心を持つそれぞれ3つの宗教の聖職者。彼等は「三宗教間対話」の目的を支援しなくてはならない。
- 2) 教会、シナゴグ、モスクまたはその他の宗教的機関における平信徒指導者。彼等は自らが属する宗教的機関の方向性、特に教育プログラムを発展させる。
- 3) ラビ、牧師、イスラームの宗教的指導者、または宗教的指導者を目指す学生。

これら3種類のグループは結果的に各々のグループの宗教的共同体に建設的な影響を与えると予想され、この3種類のグループを通じて「三宗教間対話」は平和と和解の媒

体として、多大なインパクトを持つと期待しています。

私は現在、「三宗教間対話」に参加する共同体を形成するために、神学校、宗教研究機関、教会、シナゴグ、モスクなどにおけるグループを組織化することをひとつのアイデアとして考えています。そして組織化されたグループは周囲の人々に「三宗教間対話」に関心を持たせ、そのために教育的指導者や人材的資源を提供すると考えます。⁴⁾

「三宗教間対話」を発展させる教育的指導者たちは、宗教学の教授、それぞれ3つの宗教の聖職者、紛争調停の専門家、そして心理学者というように、学際的に選ばれることが望ましいでしょう。宗教学の教授陣は、3つの宗教における啓示的文書と思想を学術的に分析または議論する主要な人材となるでしょう。聖職者たちは、それぞれ独自の宗教的伝統に見られる社会適合的価値観を、どのように各々の信徒たちの生活に取り入れるのかという実用的な疑問について話し合うでしょう。また聖職者たちは、反社会的な宗教的文書や態度がどれほどの影響力を持つのかということ、聖職者たち自身の専門的経験の見地から情報を提供します。紛争調停の専門家は、それぞれ異なった宗教の信徒たちが、異宗教間における緊張状態及び敵対関係を改善できるための戦略を考えることとなります。また、心理学者は敵意の心理学的・感情的根源についての洞察力と理解を提供し、信徒たち個々人がどのようにその根源を克服するかを支援します。例えば、心理学者は偏見や憎悪に関する社会心理学的文献から怒り、憎しみ、妬みを克服し、尊厳または愛さえも育めるような心理学的文献について議論するでしょう。

これら教育的指導者たちに加えて、このプログラムは参加者がオンラインを通じて相互関係を築けるような客員講師や客員の人材も要員とします。⁵⁾

また、「三宗教間対話」のシラバスは以下の内容を含みます：

- 1) それぞれ3つの宗教における第一次資料と第二次資料、そして紛争調停と心理学の分野の文献講読。
- 2) ただ文書を講読するよりも口頭講義の方がより効果的な場合があるので、聖典文書や他の宗教的文書の視覚聴講義と視覚聴講読を行う。
- 3) 特定の課題に関する文書、オーディオ、ビデオクリップ。例えば、以前『ニューヨークタイムズ』紙が、ヨルダン兵士によってイスラエル人が殺され、前ヨルダン国王のフセイン氏が、その犠牲者に対して喪に服するため犠牲者の家族を訪ねたことを写真と共に記事にした。プログラムでは、当時のフセイン氏の犠牲者の家族に対するコメントと、フセイン氏の訪問に対する家族側のコメントのオーディオ・クリップを見る。これらのクリップ集は心理学者や紛争調停の専門家によって分析されることが可能であり、それは憎悪を克服するステップであると同時に、敵対者同士による和解の基盤を築く一例である。

- 4) プログラム参加者が、全ての講義や議論を便宜的に再検討または考察できるようなアーカイブ。

3

それでは次に発表の第2セクションである、「三宗教間対話」のテーマのひとつにもなりうるユダヤ教とイスラームにおける懺悔について話したいと思います。

今日の発表の第2構成部分は、以前アイルランドのダブリンにある Irish School of Ecumenics of Trinity College が2004年の6月に主催した大会、Religions and the Politics of Peace and Conflict で発表した原稿に基づいています。発表のタイトルは “*Repentance as a Facilitator of Inter-group Reconciliation in Jewish and Islamic Devotional and Legal Literature*” であります。⁶⁾

ユダヤ教とイスラームは、その中核となる宗教的価値観としての他者に対する悪行への懺悔 (*teshuva/tawba*) を強調します。懺悔とは、自己考察、自己批判、悪業を否認することへの克服、後悔、謝罪、償いなどを意味します。懺悔の究極的な目標は、精神的な自己改善、正義、そして人間と神との和解であります。このような教えは、ユダヤ教とイスラームの信仰に関する諸文献の中で広くそして深く発展され、そしてその教えは精神的育成と「公正な生き方」の道標であります。またこのような教えは、ユダヤ教とイスラームにおける律法的文書、例えばトーラーとラビ教義文書に基づくハラハー、そしてクルアーンとハディースに基づくシャリーアなどに具体的に表明されています。これらの文書において、人はどのように他者に対して犯した過ちを償うべきか、そして人はどのように自らが犯した悪行を被害者から赦しを請うべきか、というような特定の指令文が見られます。

ガザーリーやマイモニデスといったような、おそらくイスラームとユダヤ教それぞれにおいて最も優れた中世の法学者であり神学者たちは、懺悔を強調した文書を残しました。彼らの研究は、彼らが属した宗教的共同体において、現在でも権威的なものとして語り続けられています。ガザーリーとマイモニデスの両者は、法的、信仰的、神学・哲学的な宗教的文書という3つの分野の専門家であり、彼らが残した最も影響力のある業績は、それら3つの要素を一体化し、統合したのです。ガザーリーは『宗教諸学の再興 (*Ihya Ulum ad-Din*)』⁶⁾、マイモニデスは『ミシュネー・トーラー』を著しています。両者はそれぞれの著書において、懺悔の性質とその重要性、また懺悔を成し遂げるための必要な手順などについて書いています。つまり多くの点において、ガザーリーとマイモニデスには深い共通点があると言えます。⁷⁾

ガザリーは、彼の著書である『懺悔についての論考』⁸⁾の中で以下のように書いています。

神の報いに従う(自分の友人に対して行った不正義の)限り、叱責は、自責の念、告解、未来における禁欲的態度、そして罪とは対極的な関係である善行を行うことによって達成される。そして告解者は、彼が傷つけたかもしれない相手に対して慈悲をもって報いる。

ガザリーによる以下の記述を読むとき、私は常に、昨今多くのムスリム聖職者から聞くユダヤ教徒の悪魔的描写やユダヤ教の中傷を心に留めます。⁹⁾

また、罪の償いは求められなくてはならないという観点からは(中傷的な)見解や特徴付けは、邪悪なものである。告解者が自分が虚げた相手に対して罪を告白したとしても、(虚げられた者)の魂は告解者の償いを赦さないし、告解者の罪は消えない。虚げられた者にとってもこのような権利は存在する。それゆえ、告解者は彼の心を懐柔させ、相手の利益に基づいて行動し、彼の心に届くように愛と思いやりを示さねばならない。つまり、善行に身を委ねるといふ事である。邪悪なものを嫌悪する人々は全て、善行に支配される。(虚げられた者の)心が(罪人の)数多なる愛情と切望によって癒されたとき、許される。罪人が彼を苦しめた分、愛情によって人を喜ばす努力が必要である。

また、マイモニデスが著した『懺悔の諸規定』¹⁰⁾による以下の文章から、私は多くのパレスチナ系アラブ人がイスラエル・パレスチナ紛争で経験した損失、痛み、屈辱などを考えます。

贖罪の日における悔い改めは、人間と神との関係における罪についてのみ償われる。例えばその罪とは禁じられた食物を食べることであたりする。しかし、人とその友人の間におこった罪、例えば相手を傷つけたり、呪ったり、相手の所有物を盗んだりといったような罪は、もし加害者が被害者に償って相手の気持ちを鎮めなければ、決して赦されることはない。加害者が金銭面で解決しようとも、彼は相手の気持ちを鎮め、赦しを請わなくてはならない。例えば加害者が彼の隣人に言葉で怒らせただけであっても、被害者が彼を赦すまで相手に赦しを懇願し、平和的に解決しなければならない。もし加害者の友人が彼を赦すことに躊躇するのであれば、彼は被害者をなだめるために自分の隣人たちと一緒に赦しを請わなければならない。それでも赦されないのであれば2度、3度と隣人とともに赦しを乞わなければならない。それでも被害者が赦さないのであれば、加害者は立ち去るべきである。相手の罪を赦さないという罪が被害者の罪に残るのである...

ユダヤ教徒とムスリム間の紛争において、懺悔がどのように建設的な役割を果たすのかということ考察する前に、異教徒、罪人、他者など、「他者」という考えについて触れる必要が在ります。

伝統的なユダヤ教とイスラームは、信仰の根本を否定するようないわゆる異教徒と見

なされる人々や、由々しき罪を犯した罪人たちに関しては、ほとんど同情の念がありません。¹¹⁾ヘブライ語で「コフェル」、アラブ語で「カーフィル」という言葉がありますが、それは神または神の支配を否定する異教徒を意味し、彼等は原則的には死んで当然だとされています。それぞれユダヤ教とイスラームは、他の信仰を宗教的真理の歪みだと考え、それ故に必ずしも彼等が罪人だとは決め付けませんが、罪人というものに執着します。ユダヤ教とイスラームの宗教的法典による規則は、他の信仰者にもその範囲を拡大するものの、ユダヤ教とイスラームの「信者」の法的権利とは平等ではありません。このように、ふたつの宗教において二元的倫理が発展しうるので。

異教徒や罪人のような他者を否定的に分類することは、他者に対して攻撃的で有害な行動を正当化し、大目にみたり、無視したり、促進させることとなります。例えばハラハーやシャリーアがそのような行動を公的に認めないとしても、上記のような否定的な態度は「他者」に対する攻撃を助長してしまいます。時にはハラハーとシャリーアでさえも「異端者」もしくは救い難い罪人に対する暴力を支持することがあります。¹²⁾

敬虔なユダヤ教徒とムスリムたちは、寛容性と多元的共存を実行することが可能なのでしょうか。彼等は、異教徒や他宗教の信徒に対して不当で攻撃的な行動をとることが賞賛に値するよりも、むしろ罪であるという観念を受け入れることができるのでしょうか。それは彼等にとって非常に難しく、なぜならば問題は「原理主義的」文書に基づく教義だけでなく、彼等が異端者や異教徒は潜在的に危険な存在であると信じているからです。そして彼等は、異端者や異教徒たちが、罪深く、墮落した、退廃しやすい行動に従事し、また敬虔な信仰者の繁栄に悪影響を及ぼし脅威をつきつけるような考えを広めると信じているのです。

しかしながら、もしも敬虔なユダヤ教徒やムスリムたちが異教で罪深い「他者」を寛容する理論的根拠を見出すことができるのなら、敬虔な信者たちは自らが「他者」に対して犯した傷つけるような行為を懺悔することに感謝し、自らの考えが誤っていたことに気づき、威厳と正義を獲得することができるかもしれません。

以下における項目は、現代のユダヤ教とムスリムの宗教的指導者や研究者たちの課題であります。

- 1) 宗教的指導者や研究者たちが、多くの他宗教信者を時には愛と思いやりをもって喜んで受け入れ、正しく接するような信徒を増やしていくこと。
- 2) 宗教的指導者や研究者たちは、宗教的正当化のもとに、他宗教信者や特定の罪人を害することを制限する必要がある。¹³⁾
- 3) 宗教的指導者や研究者たちは、懺悔 (*tawba*) の中心となる宗教的責務を、世俗主義者や罪人、他宗教信者に対して誤った行動を起こしている人々がいるという事実

に、拡大して関連づけなくてはならない。

- 4) 宗教的指導者や研究者たちは、懺悔 (*tawba*) の義務を、「敵」に対しての攻撃的な行動があるという事実拡大して関連づけなくてはならない。そして人々が敵視する共同体の無害な信徒たちを不当に苦しめているということを、慎重かつ厳格に制限しなくてはならない。

ムスリムの懺悔について興味深い記述が、2003年11月28日のニューヨークタイムズ紙の *Telling the Truth, Facing the Whip* という記事に書かれています。その記事は、サウジアラビアの記者である Mansour al-Nogaidan 氏がニューヨークタイムズ紙に宛てた手紙に基づいています。

先日、私は75回における鞭打ちの刑を受けるためにサハファ警察署を訪れなくてはなりません。サウジアラビアの公的な宗教的教義であるワッハーブ主義を批判し、言論の自由を記事にしたため、宗教裁判において上記のような判決を下されたのです。我が国において最も大きなモスクで国から雇われている聖職者が、イスラームを信仰しない者に対して呪い続け、破滅を呼びかけたという事実があります。しかしながら私は、そのような事実がありながら、我が国の公務員や専門家たちが、サウジアラビア社会は他国を愛し、他国の平和を願うと主張しつづけることに矛盾を感じるのです。最近における宗教紛争が示すように、我々は国内においてシーア派やスーフィーを含んだ宗教的少数派を断絶するような過激的宗教文化に対抗するべく、今まで以上に他国に助けを求めなくてはならないのです。しかし我々は、そのような宗教的過激派はサウジアラビアの多くの世代に教化されたものであり、それを打破することは非常に困難であることを認識しなければなりません。それは私自身が、以前、過激派を支持していた経験があるので良く分かります。私が16歳の時から11年間、私はワッハーブ派の過激論者でした。私と同じ考えを持つ同胞と共に、私は西洋映画を販売するビデオ店を放火し、女性の解放運動を危険視していたため、自分の村の未亡人や孤児を援助する慈善団体さえも焼き払いました。その後、私は刑務所で2年間服役し独房で孤独を感じていた時、私の妹が本を持って訪れ、自由主義のムスリム哲学者を紹介してくれました。そして私は目を逸らしたくなるような疑惑、つまりイスラームはワッハーブ派だけではなく、愛と寛容を教える信仰なのだということに気がつくようになりました。それに気づいたことによって自分自身も傷つきましたが、その痛みを取り払うため、私はワッハーブ派の過ちについて書き始め、自分が犯した過去の無知と暴力を償い、平和を達成しようという努力をはじめました。そして国家としてのサウジアラビアは再生しなければならないということに気づいたのです。我々は自分が犯した過ちの痛みを受け入れ、どのように自己改革できるかを学ぶ必要があるのです。我々は、我々自身が過去20年間に渡って犯してきた犯罪の重大な結果に立ち向かう能力と忍耐を必要としています。私たちの国サウジアラビアが、他の世界中の国からテロリストを生む国家だと思われた時、我々はまず第一段階としてそのようなイメージを修正し、またその根源にあるものを根絶する必要があり、またそれが可能であると思います。

もし犠牲者の中から引き出すべき懺悔や赦しがあり、紛争調停に建設的な役割を果

たすのであれば、それを敵対者たちの道徳的責任の程度に関する疑問として、平和のためと理由付けて見逃がすことはできません。しかし対立者同士の和解は、それが頻繁に起こりえないとしても、両方のグループが痛みを伴いながらも相互関係を築いて、その関係の解釈を共有するということに基づかななくてはならないのです。また和解とは、完全なる懺悔と完全なる赦し、また過去長く続いた紛争において犯された不正義すべての改正をなくしては、実現可能にはならないのです。もし対立する互いのグループが相手をより理解し、懺悔と赦しの幾つかの要素を利用するのであれば、それが個人的なレベル、「政治的」または経済的レベルであっても、相互理解は紛争中断と平和的共存の機会となりえるでしょう。何らかの場面において、対立者同士における積極的な態度と感情の発展を伴った深い和解というものは、今後明らかになっていくと思います。紛争調停と和解は、敵対者たちが過去における過酷な過ちを否定することを求めているわけではありません。逆に、過去に対するより真摯な受け止めや過去に犯した過ちへの認知、それに対する後悔の表明、そして赦しを請うために過ちを償うため努力することなどが、対立者同士の平和的関係を今後より可能にするのです。

対立集団における和平及び紛争調停は、紛争に従事する個人のレベルから、政治的・国家的指導者のレベルの間で直接行われることが可能です。和平の目的を達成しようとする人々が敵対者たちから直接被害を受けることもあります。そのような試みは対立集団の視点から見て、紛争から直接被害を受けないという懐柔的態度よりも、より正当性がある信憑性が高いものであります。もしパレスチナ人による爆弾テロによって負傷したユダヤ人や、イスラエル人による爆弾テロによって負傷したパレスチナ人、または紛争によって死亡したユダヤ人やパレスチナ人の親が対立関係や憎しみを克服しようと真剣に試みることができるのであれば、ユダヤ人やパレスチナ人の苦しみはより緩和され、和平の可能性がより受け入れられやすくなるでしょう。イスラエル・パレスチナ紛争で命を亡くした者の親戚や家族で構成された「ペアレンツ・サークル」というグループは、和平の可能性がある度に会合を開いてきました。イスラエル人、パレスチナ人双方ともに正義は自分たちにあると信じているため、赦しや罪の認知を意味する懺悔という観点から見ると、和平の可能性は難しくなるのです。しかし個人レベルにおける敵意を乗り越えようとする実践的で相互に有益な目標に焦点を当てることによって、和平への希望が平和交渉への政治的模索を強化できるのです。

ただし法的な強制がなくとも敵対者とともに意欲的に平和交渉することは、自分自身の憎しみに共感し、その憎しみを正当化することを快く認めさせてしまうことであるかもしれません。しかしそれはまた、彼の今までの行為が正当化されないという事実、積極的に自己批判的立場に立つことができる機会かもしれません。このような試みは、

懺悔の初期段階なのです。

集団による懺悔、和解、または紛争調停は、政治的・宗教的な次元で、集団の指導者のレベルにおいても行われます。紛争に関わる集団において尊敬を集める指導者たちは、彼等が謝罪、懺悔、そして赦しのために和解に対して主導権を握り、その時指導者たちが導く集団に対して強力な影響力を持つことができるのです。これら指導者たちによる言動は、彼等の支持者にたいして、紛争調停に平和的目的の模範を提示するという意味で重要であります。さらに、指導者たちは紛争調停に反対するグループに対しても強いインパクトを持ち、敵対者、少なくとも敵対者のリーダーに対して平和的アプローチの模範を示すことで、紛争における和平の再評価と責任を理解させ、敵対者グループを和解に導くことができるかもしれません。

イスラエル・パレスチナ紛争における敵対者たちがそれぞれユダヤ教とイスラームの宗教的価値観に共感するのであれば、懺悔を求めるということは両者にとって重要といえます。宗教的価値観に訴えるということは、敵対者よりもむしろ、支持を集める宗教的指導者たちにとって最も効果的なのです。ラビがムスリムに懺悔を説いたり、イマームがユダヤ教徒に懺悔を教えることは、懺悔に関して困難で感情的に屈折したプロセスに向かうというよりも、憤りや抵抗、そして反感を生み出すことになるでしょう。¹⁴⁾

おそらく自責の念や悔い改め、赦しなどの宗教的価値観を強調し、対立している様々な宗教の聖職者たちが各々の宗教的伝統がどのように和平に貢献できるかをより深く理解しようとするのが、紛争調停に最も効果的な方法論でしょう。例えば、もし様々な宗教の聖職者たちが、紛争に関連して自分の信徒が罪深い行為を犯した時、その罪を悔い改める必要があると全員一致で認識するのであれば、聖職者たちは懺悔とも言える自己改革のプロセスを目的に、信徒たちを教育することができるのです。ラビやイマームは、殺人を犯した者を罪人として声高に咎めなくてはなりません。咎めるということは宗教的教育を通じて、殺人者を支持する人々の態度や行動を改めさせることを、その支持者たちに要求するという意味であります。言い換えれば、その支持者たちに懺悔を求めるということです。宗教的指導者たちは、信徒たちが自らの個人的な罪を償うよう定期的に訓告します。そして信徒たちは、政治的活動という庇護の下に犯した罪に対して積極的に懺悔しなくてはなりません。エフド・ルツ (Ehud Luz) 氏は、彼の著書である *Wrestling with an Angel: Power, Morality, and Jewish Identity* の中で、以下のように指摘しています。

時折、生き残りたいと願うすべての国家は、絶対的な道徳の規律を破らなくてはならない。しかしマーティン・ブーバーが整然と強調するように、時には国家の運命は、国家の指導者たちが完全なる道徳的清算というものを意欲的に形成することにかかっている。

る。…人々の関係性の中で共通することは、個人の過ちを認めることよりも、相互非難することである。…全ての文明国家は、ある程度の罪悪感情というものが必要である。…自分たちが常に正義であり、全ての非難は敵対者の規律に置き換えられるという仮説は、敵対者と対話するいかなる機会をも不可能にしてしまう。「自分自身が完全に罪のない人間だと思っている者は、彼の周囲の人々と決して分かち合えることはないであろう。…もし敵対者同士が互いに必要な存在であると認知できないのであれば、対立する両者の関係に真なる調和もしくは永続的な協定はあり得ない。そして相互関係の必然性を認知する前に、罪の意識というものを人々は感じなくてはならない」(Ben Halpern, pps. 224-246)

現在のユダヤ教徒とパレスチナ人・アラブ人之間にある憎悪や敵意の程度を考慮すると、この先、和平調停の達成は困難で大変なものであり、もしかしたら将来実現不可能かもしれません。しかし過去を振り返れば、とりわけイスラエルにおいて私的領域、時には公的領域においてさえ幾つかの試みがなされてきました。それは例えばマーク・ゴピンが彼の著書である *Holy War, Holy Peace: How Religion Can Bring Peace to the Middle East* において示しています。¹⁵⁾

1世紀にラビであるタルフォン (Tarfon) 師が以下のように述べています。「あなたは完成するために召し出されたのではない。しかし、回避するわけにもいかない。」(教父の倫理1:21)

この CISMOR が主催するような会議やプロジェクトを組織し参加するということは、ラビ・タルフォンによる説諭への応答の一手段であると思います。

4

本発表の第3章においては、インターネットにおけるユダヤ教倫理の講義について概説したいと思います。我々ヘブライ大学またアメリカにおける大学や企業で通信教育講座として幅広く認知されている Blackboard と呼ばれる教育ソフトウェア網領は、「三宗教間対話」を推進するうえで積極的に適用されることが出来ます。

Using Midrash and Aggadah to Teach Ethics という授業は、アメリカ、スイス、そしてイスラエルに在住する6名の大学院生によって、オンライン・セミナーを通じて行われました。シラバスを始めとして、授業の講読課題である文献などは、私がウェブサイトを通じて学生に送信します。学生はデジタル化されたテキストや専門書などを購入することが必要ですが、それらはウェブサイトから講読することも、ダウンロードまたは印刷することもできます。¹⁶⁾

私自身、また学生たちは、ウェブサイトには自分の写真などを掲載して互いに自己紹介

し、自分の興味がある文献やオーディオファイルに簡単に紹介します。このような作業は単純に「バーチャルな」相互関連ではなく、「現実的な」感覚を提供するのです。また上記のような目的で、私はセメスター中にウェブサイトを通じてライブ・カンファレンスを取り入れました。

本授業の「中核」となるのは議論版と称するウェブサイト上の掲示板にあります。そこに私が学生に課題を送信し、学生がまたそこに課題を提出します。私たち全員が、各々の課題やそれに対する意見を読むことができ（または、もし送信したものがオーディオファイルなどであれば聞くことも可能です）、授業内において躍動的な議論が展開できます。それぞれ異なったトピックによって Thread と称する議論の記録のようなものが細分化され、それら全ての記録・文献は授業持続期間中に、全ての学生が過去の記録・文献にアクセスできるようになっています。

図1は本授業で使われたひとつのウェブページのコピーです。この細分化された項目



図 1

は「ユダヤ教倫理」の意味をどのように定義づけるかというものであります。(インデント付けに従って)見れば分かるように、私は学生たちから「ユダヤ教倫理」に関する質問を受け、それに対してさらに学生の間に議論が発展するように提示しています。

このように CISMOR における本日の発表は「三宗教間対話」を発展させるべく、このオンライン授業がどのように機能し、世界中の教員や学生が連携的を図って研究または議論することを可能にする方法について話させていただきました。そこにおいてはテクノロジーの利用によって活発な議論が交わされるのです。重要なのは、授業における議論の中で取り上げられた質問や疑問の要点であります。それに対する答えは、私とヘブライ大学の同僚たちが8年の間にオンライン授業を効果的に教えてきた経験に基づくものであり、我々は現在ユダヤ学におけるオンラインの修士課程を提案しています。

5

質問：非常に興味深いことですが、著作権を持つ多くの文献をコースパックによってどのように取り扱われているのですか。

シンメル：コースパックはアメリカ合衆国の多くの大学で利用されており、その経済的価値も高いものです。我々はしばしば著作権問題で文献等を入手できないこともあり、別の方法で文献にアクセスしなくてはなりません。初回の授業が始まる前に、学生たちがコースパックを利用できるようにすることは重要です。それゆえ私たちは数カ月前にシラバスの準備を完成しなくてはなりません。なぜならコースパックを扱う企業も著作権の了承を得るため問い合わせねばなりませんし、もしコースパックがデジタル化されていないのであれば、事前に文献をスキャンしなくてはならないからです。

質問：教育経験について質問したいと思います。授業においてそれほど教育する機会がなく、学生の顔も全く見れないのであれば、全てが文書化されたデータの中で授業が行われるということになります。そこでオンライン授業は、通常の授業とどのように違うのでしょうか。学生と教員、双方の視点から知りたいと思います。

シンメル：それは非常に良い質問だと思います。その質問に関しては様々な点から答える価値があるでしょう。まず始めに、オンライン授業ではテキスト文書だけでなくオーディオファイルも使用し、通常の授業でさえも、数人の教員たちは非常に広範囲にわたってオーディオファイルを利用しています。私自身も、幾つかの通常の授業において、その授業の性質に従ってオーディオファイルを活用した経験があります。

ここ数年の間に、ほとんど全てのラップトップ型コンピューターがビデオストリーミ

ング機能を搭載することができるでしょう。そうなれば実際のライブ中継による発表などが見られるようになり、通信教育の環境全体が変化することが予想されます。

またこのオンライン授業では、学生たちに自分の写真や簡単な自己紹介、興味のあるテーマなどをウェブサイト掲示板に掲載するようにさせています。私が受け持つ *Using Midrash and Aggadah to Teach Ethics* という授業から、ひとつの例を挙げてみましょう。この授業にイスラエルから参加している学生がいますが、彼は簡単に自己紹介し、彼の生活がいかにキブツに基づいているか、そして彼が興味を示すウェブサイトなどを紹介しています。このように、教員や他の学生たちは彼についてより個人的に知ることになります。

この学生はギター演奏に自信を持っている人物です。彼はコネチカット州に住んでおり、ニューヨーク市にある学校のラビになるために勉強中ですが、その学校に就職するために私のオンライン授業を履修していました。彼は私たちに、彼が過去数年間テレビ局のディレクターとプロデューサーとして働いており、その経験を通じてラビになることに関心を抱いたと話してくれました。

つまり、私や学生たちは互いに写真を見て、互いの関心を知り、もしオーディオファイルをウェブサイトに掲載するならば互いの声も聞けることができます。

また、我々はオンラインプログラムに参加する全ての学生たちに、実際にボストンにあるキャンパスを訪問し、一週間限定の夏期授業に参加するよう促しています。その授業には、アフリカのガーナ共和国の牧師、東京のブラジル副領事など、世界中から多くの人々が参加しました。

さらに、決して容易なことではありませんが、ライブ中継によるテレコンファレンスを開催しました。我々は2時間の電話通信時間を設けて、電話通信会社のサービスを通じてライブ・議論を行いました。その時生じた問題は経済面ではなく、時間帯による問題で全ての参加希望者が参加できないということでした。

もし、様々な想像力を働かせれば、オンライン環境で学ぶ学生の感性を養う様々な方法を考えることができるでしょう。実際に多くの学生たちが積極的にボストンに来て互いに会いそして、「なるほど、あなたが私とオンラインで頻繁に会話していた人でしたか。実際に個人的に会えてとても嬉しいです」といったような会話がなされました。

結局、オンラインでの教育、学習というものは決して容易に達成できるものではありませんが、それでも効果的に機能しているのです。

私がオンライン教育での経験から学んだ非常に重要なことは、もしも全ての学生が教員の講義を全てウェブサイト上で文書化するのであれば、テクノロジーを過剰に重視するためオンライン教育の意義はなくなります。オンライン教育は単にテクノロジーを利

用するだけではないのです。あらゆる全ての異なった状況に従って、テクノロジーを利用し、それに応じて教育方針を変えなくてはならないのです。どのようにテクノロジーを効果的に利用し、もし学生同士の関係がバーチャル上に限られるのであればどのようにして学生たちの間に共同体としての感覚を生み出すのか、ということなどをオンライン授業の経験を通じて学ぶことができ、また学ぶ必要性があります。私たちのヘブライ・カレッジは小さなクラスを幾つか持っており、クラスを運営するのは容易ですが、それでもただ講義をするだけには留まりません。例えばクラスに参加する学生たちが何かと議論し合い、それについて各々がどのように考えるかなど、相互関係を築くよう促さなくてはなりません。その際、学生たちが互いに話し合えるためには、どのように自分が仲介者になるのかということを知る必要があります。

学生たちは特定のトピックに強く関心を抱きますが、しばしば彼等は脱線的な議論に陥ることもあります。先ほどの発表で前述したように、全ての学生は、他の全ての学生が書いてきたものを読まなくてはなりません。それは非常に多くの時間とエネルギーを消耗することであり、それゆえ unnecessary な議論に時間を費やしたいとは思わないでしょう。だからこそ、私は学生たちが *shmooze* (おしゃべりする) ことができるように特定の掲示板をつくるのです。 *shmooze* というのはイデッシュの言葉 (ヘブライ語ではなく、ヨーロッパにおいてユダヤ人とドイツ人の対話から発展した言語) で、それは「言いたいことを言う」ために集まるという意味です。カフェテリアのような場所で形式ばらない会話を持つことを日本語でどのように表現するのか私には分かりませんが、そのような言葉が日本にもあると思います。そのような理由で私は学生たちに以下のように言います。ギター演奏が得意な学生と、また彼の音楽生活にキブツがどのように関わっているのか興味があって彼と話したいのであれば、必ずしも常に掲示板に掲載される Thread において学術的見地から質疑応答するだけでなく、実際に個人的関係を築きなさい、と。ウェブサイト上で「おしゃべりする」場を設けて個人的関係を築きなさいと言えば、学生たちは実際に「おしゃべりする」場で頻繁に「おしゃべり」するのです。その場ではあらゆる種類の会話がなされ、例えば彼等の家族について、休暇旅行について、ボストン・レッドソックスについてなど、様々です。その場は共同体を形成する意味で重要であり、それによって学生たちは他の学生たちと個人的に関係を築いていけるのです。

私はそれでも個人的には通常の授業を好みます。なぜならば授業において、個人的な相互関係や、アイ・コンタクト、身振り手振り、そして声の抑揚などはオンライン環境においては行うことができないからです (もしビデオストリーミング機能を使用できない場合)。これはオンライン教育の消極的側面であり、しかしながら積極的側面

に目を向けると、オンライン授業にはイスラエルや日本など世界中から勉強するための参加者がいます。それは多様性という積極的側面であります。さらには、学生たちは物理的に姿を現して授業に参加する必要もありませんし、様々な時間帯にアクセスできます。例を挙げると、ある学生は午前2時に課題に取り組むことを好みます。それはおそらく彼に子供がいて、子供が寝た後に課題に集中したいのかもしれませんが。子供が寝た後に、彼はコンピューターに向かい、文献や他の学生たちの課題等を読むことに集中できます。それは学生たちにとって素晴らしいほどの柔軟的環境なのです。

授業のはじめに、私は学生たちに各週の特定の曜日にしか掲示板を見ないことを伝えます。私にも他にすべきことが多々あるので、その授業だけに毎日集中することを期待されたくないのです。例えば、私は学生たちに、私は木曜日に次週の質問や先週学生から受けた質問やコメント等への返答を掲示板に送信することを伝えます。私は非常に限定してスケジュールを組んできました。さもなければたった6人の学生たちに自分の仕事や生活が束縛されてしまうからです。もし私が20人の学生を持ったと想像してください！小原先生は、相当な数の学生のレポートを評価しなくてはならないと私に教えて下さいました。私には信じられませんでした。もし私も小原先生のようにしなくてはならないのであれば、私は日本で教えたくないと答えました。緻密な制限を持って物事を管理すれば、それが実現可能になるのです。

ユダヤ教倫理の授業では、私は謙遜の美德について「説教」していました。如実な話をさせていただくために、謙遜についての議論はここでは避けたいと思います。学生たちはこの授業が非常に好意的で、高い評価を得ました。

我々のヘブライ・カレッジには非常に優秀な学生たちが入学してきます。最も優秀な学生たちの中には数学や物理学の博士号を取得しており、なおかつユダヤ教倫理に関心を抱く者もいます。そのような学生たちは、大学の近辺に住んでいないか、もしくは専任講師などの仕事で忙しいために大学の授業に来ることができません。しかし彼等は複数のオンライン授業を履修することができ、我々ヘブライ・カレッジ通信制のユダヤ学の修士号を取得することも可能なのです。

質問：前述されたオンライン授業に関する提案または考え、つまり指導者チームがそれぞれ3つ宗教に属する聖職者、心理学者、そして紛争調停の専門家から構成されるという点についてお伺いしたいと思います。私自身もチーム・ティーチングの経験があり、そして様々な分野からチームが構成される故にそれがいかに困難であるかも承知しています。そこで教員が授業で学生を持つ前に、大きな問題に直面します。それは、指導者たちがどのようにしてオンライン授業に関わるのかという問題です。あなたがこの提案

について熟考し、プログラムの資金援助申請を提出するのならば、まず指導者たちはどのようにこのオンライン授業の準備をするのでしょうか。指導者たちがオンライン授業を進めていく上で、あなたは指導者たちをどのように援助していこうと考えているのですか。

シンメル：まず最初にやらなくてはならないことは、「三宗教間対話」のようなプロジェクトを評価し、非常に高い関心をもつ教員たちを探すということです。ご存知のように、やれば出来るのです。もし「三宗教間対話」のようなプロジェクトを導入したいという動機があるのであれば、二つの問題について考えなくてはなりません。ひとつは、教員たちが教育学的効果のためにどのようにインターネットを使って教育するか訓練する必要があります。それは技術的で教育学的問題です。この資金援助申請の一部には、教員のための集中的な一週間のトレーニング・セッションが含まれています。また少なくともアメリカにおいては、今までに似たようなソフトウェア綱領を利用して訓練してきた多くの教員たちがいます。例え採用したい指導者が技術的経験に欠けていたとしても、彼等が学びたいという意味がある限り、大きな問題にはなりません。

私自身もコンピューターに関してそれほど知識があるわけではありません。技術面においても然りです。しかし8年ほど前から、自分が教育の現場から引退しても何らかの形で教え続けたいと思うようになりました。可能性の問題として言うならば、将来私は火星から技術を利用して教育することもできるでしょう。また美しい温泉がある鞍馬を訪れ、温泉に入りながらワイヤレスのラップトップ型コンピューターを利用して授業することも可能です。このように、人々がこの技術をどのように利用したらよいか、積極的に学習できるかという実践的な理由があるのです。

しかしより重要な問題は、自分自身の信仰を批判的に考察してまで、困難な課題に意欲的に取り組もうとする人々をどのように獲得するか、ということだと思います。一度世界中にいるそのような人々を見つければ（実際 CISMOR にいらっしゃるみなさんはさまざまな活動をされています）「三宗教間対話」は舞台作品のようなものであるため責任者が必要になります。「三宗教間対話」の目的に従って、様々な目的のために構成される指導者グループに、それぞれの責任を分配する責任者が必要であるわけです。

「三宗教間対話」は単純に授業を運営することとは異なります。というのも宗教間対話に関心を持つ財団、例えばピュー財団やリリー財団、フォード財団などから資金援助を受ける必要があるからです。私見ではありますが「三宗教間対話」の潜在性が非常に優れていることを、市場性が高いと説得力をもって資金援助申請しなくてはなりません。

また前述したように、もしそれぞれ3つの宗教から指導者たちを集める際に、どの

ように指導者たちを誠実で自己批判的な対話に従事させ、互いに尊重しあうように促すのかという点も重要です。宗教的多元主義者になる指導者たちを獲得する方法のひとつは、指導者たち自身の信仰が絶対的で排他的ではないということを認識させることです。もしかしたらあなた方は嬉しそうにこのように言うかもしれません。「私のキリスト教解釈は私にとって意義のあるものであり、なぜならば私自身がキリスト教に社会化され、キリスト教が私に語りかけてくるからです。しかし私は、イスラームやユダヤ教、仏教、神道、そしてヒンドゥー教も、それらを信仰する人々にとって意義のあるものであり、そして彼等の信ずる真理が私の信ずる真理より決して偉大ではないと気づいたのです。」

昨日、私は同志社大学の裏手にある禅宗の寺院周辺を歩いていました。そして結婚する予定がないという修行中の僧侶と会話をしました。彼が結婚しない理由は彼の人生すべてを、仏教を教え、また仏教に生きることに捧げたいというものでした。彼は私に、彼がキリスト教と新約聖書に関心を抱いており、イスラエルにも幾度か訪れたことがあると話してくれました。私は彼に、彼のキリスト教に対する関心または彼のイエスや礼典への敬意と、彼の仏教に対する従事の間に関心または何か不調和が見られるかと問いました。彼は、どのような不調和も見られないと答えました。そこで私は、日本、もしかしたら他のアジア文化には何かしらの寛容性もしくは宗教的多元主義が存在し、そこにおいては西洋の一神教に見られるより教義主義的な考え方というのが無いのではないかと感じました。

このように、もし人々が自分自身の宗教的観念が唯一的で絶対的な真理ではないということを積極的に認めるのならば、そのような人々は「三宗教間対話」に参加することはより容易になると言えるわけです。しかしながら本当に参加する必要がある人に限って、そのような考えを持っていないこともあります。その場合、そのような人々には異なったアプローチで指導者になるよう採択しなくてはならず、彼等に自分自身の宗教が絶対的真理だと立証するということを信じ続けることを教えなくてはなりません。ムスリムにとって、クルアーンは神の完全なる啓示であります。キリスト教徒にとっては、イエスは神の子に他なりません。ユダヤ教徒にとってトーラーは、モーセに対する神の啓示であります。それは彼等にとっては真実であり、そのような絶対主義的価値観を放棄する必要はありません。しかし、そのような絶対主義的観念もしくは伝統の枠組みの中においても、人々は社会適合的な要素に気づき、そして教え、また今日における宗教対話において実用性と発展を促すことができるのです。

質問：通常の授業と比較して、オンライン授業は継続するのに長い時間がかかると思うのですが。

シンメル：その通りです。それは教員にとって非常に時間を消費するという点で困難であります。ある教授はオンライン授業を念入りに準備しますが、そうでない教授たちもいます。学生に対する応答に時間を何時間も費やす教授もいるのです。私は学生たちに、オンライン授業の運営は非常に時間の消費が激しいため、私が学生たちの意見や質問すべてに回答することはできないということを、学生たち自身も理解する必要があると話しています。学生たちが意見または質問した幾つかの点について、私は回答するということです。

もし私が学生であると仮定するならば、私は2時間かけて課題のエッセイを書き、教員にそれを読んで応答してほしいと思うでしょう。しかし私が15人の学生を受け持つ教員である場合、それは非常に時間を消費することでもあります。つまり、学生に対して公正になるよう授業を運営しなくてはなりません、同時に指導する立場にある者にとっても授業は現実的で公正なものでなくてはなりません。

コメント：私はイスラエルの公開大学において1年半オンライン教育に携わってきました。そこではあなたが使用しているようなシステムも（基本的に）利用し、事前に準備するため他の教員や学生たちの支援を受けて多くの時間を費やしてきました。私はひとつのオンライン授業を運営する上で、履修する70人の学生たちに毎日応答しました。

質問：教授陣はオンライン教育に参加する義務があるのですか。

シンメル：いいえ。我々は教員たちにオンラインシステムを利用することを要求することはありませんが、推奨はします。例えば、通常の授業に対しての準備と異なり、オンライン授業の準備は時間がかかるため、大学側は教授に準備時間として付加給与を与えます。

思い出していただきたいのは、一度テキストや資料が準備されれば、少量の修正でそれらを再利用できるのです。

森先生が質問された、時間消費の問題に戻りたいと思います。時間消費の問題に関しては、ふたつ問題が挙げられます。我々の授業は学生数も15人程度で比較的小さく、時間消費の点で実現可能です。この授業は大学院レベルにおける演習であります。私が提案する「三宗教間対話」においては、ひとつの「授業」につき20人から25人の学生が参加することが予想され、様々な人々が集まってくるでしょう。

もうひとつの問題は我々の教育スタイルであり、それはアメリカの教育、少なくとも高水準のアメリカの教育と、ユダヤ教伝統のタルムード研究の両方において非常に重

要であります。そこでは相互関係、討論、弁証法的質疑応答が非常に重要になってきます。それは徒弟制度的な教育型ではありません。授業に出るなり、「私はあらゆる知識を有する教授である。あなた方がこの授業に3万ドル支払っているとしても、私から学ぶことを幸福に感じなさい。私は喜んで私の知識をあなた方に授けよう」、などとは言いません。Blackboard 綱領の美德とは、学生たちがある議題に疑問を抱き、それに挑戦し、そして質問を投げかけ、討論し、そして教授と共に相互関係の内に対話していくことを促すという教育的哲学にその綱領が適応することにあります。それは教授たちがより多くの知識を持っていないという意味ではなく、教授たちが批判的思考を促すことを欲求し、そしてそれが達成されるならばこの綱領は非常に伝達性があるものであるということです。アメリカ的視点またはユダヤ的視点から、この綱領は我々の教育的哲学に非常にうまく適応しているのです。

質問：言語の問題はどうでしょう。もし日本で我々が（「三宗教間対話」）に従事するならば、言語は英語でなくてはなりません。

シンメル：確かにそうかもしれません。もしアメリカの財団が資金援助を施すというのであれば尚更です。もしイスラームの財団が資金援助を申し出たのであれば、「三宗教間対話」はアラビア語で行われるでしょうし、財団にはその権利があります。しかしそれはアラビア語を話せない参加者を排除することになります。

質問：しかし「三宗教間対話」の場において細分化されたグループが存在しています。アラビア語を話せる指導者たちが、少数のアラビア語を話す学生たちと小さな会話の機会を設けることは予想できます。それは文化を超えて共有する道でもあるでしょう。

シンメル：その通りです。しかしながら排他的な派閥集団になってはなりません。重要な点は全ての人々が他のすべての人々と相互関係を築くことにあるのです。

質問：私たちの大学ではスペイン語の授業と英語の授業があり、そこではスペイン語を話すサブ・グループと、英語を話すサブ・グループがあり、相互関係を築いています。他言語を話すことを躊躇する人々が母国語では非常に開放的になるという理由で、サブ・グループの相互関係は良く機能しています。

シンメル：確かにそうですね。またオンラインフォーマット上に学生たちが課題を書いて提出する前に、慎重に物事を考えることを学習します。授業において、もし私が何か愚かな発言をしたとしても、学生たちは次の日にはそのことを忘れてくれるでしょう。しかしオンラインにおいては一度「送信」ボタンをクリックしてしまえばそれで終わり

です。自分のこれからの人生において、自分が送信したものに責任を取らなければならず、それゆえ自分が書くことに対して慎重に考えようと努力するのです。これは高水準の授業に他なりません。

また気をつけなくてはならないのは、教員も学生たちも慎重に学習しなくてはならないということです。個人的な相互関係の中で、私がある学生の身振り手振りや声の抑揚などを聞いたとき、もしかしたら私に対して不愉快なコメントをしてしまうかもしれないし、また逆に相互関係の雰囲気によければ、冗談を言うこともできるのです。しかしそのような行為をオンライン上でする場合には多くの誤解が生じ、それゆえ教員も学生たちもすべて、何か発言したり書いたりする際に参加者に対してどのように慎重になればよいのかを学ぶ必要があるのです。今まで幾つかの授業において学生が非常に激怒するようなケースは時々ありました。人は他者に敬意を払うという技術を身に着けなくてはなりません。特に「三宗教間対話」のような痛みをともなう挑発的な問題を扱う場合、非常に他者の感情を傷つける可能性があるということに気をつけなくてはなりません。

質問：何人くらいのムスリムやキリスト教徒がオンライン授業に参加しているのですか。

シンメル：何人かいます。ひとはラーマッター在住のパレスチナ人で、その学生はオンライン授業を取り続け、夏にはヘブライ・カレッジを訪れて追加滞在し、私が教えるタルムードの授業を履修しました。もし修士課程に入学したいのであれば、正式な入学手続きに合格しなくてはなりません。しかしただ履修単位のためだけに授業に参加し、修士号を取得することが目的でないのであれば問題はありません。つまりもし同志社大学の学生がラビ教義の文献を学ぶことに関心があり、タルムードの授業を履修すれば、ヘブライ・カレッジのオンライン授業を受講することは認められる、ヘブライ・カレッジ神学部は同志社の履修単位の代わりとしてタルムードの授業の履修単位を与えることができます。聴講生のように単に授業に参加する学生たちは、履修単位には関心がありません。もし彼等が授業を履修したいのであれば、授業への積極的参加を期待します。我々は今まで何人かのムスリムやアラブ系の学生を受け入れましたし、これからもより多くの様々な学生が参加することを期待しています。

CISMOR や全米教会協議会の宗教間対話委員会のような組織または機構が、この「三宗教間対話プロジェクト」に関心を持たれることを期待します。またアメリカ国内や他国においてこのプロジェクトの資金援助をくださる財団に援助申請を行い、より一層発展させていきたいと思えます。

注

- 1) Marc Gopin, *Between Eden and Armageddon*, Oxford University Press, 2000.
- 2) このテーマは著者の大きな関心でもある。以下を参照。Solomon Schimmel, *Wounds Not Healed by Time: The Power of Repentance and Forgiveness*, Oxford University Press, 2002.
- 3) この議論は著者が出版した本の主題でもある。以下を参照。Solomon Schimmel, *The Seven Deadly Sins: Jewish, Christian, and Classical Reflections on Human Psychology*, Oxford University Press, 1977. 本書はユダヤ教とキリスト教が、悪徳と美德について、または精神的・道徳的価値観を教化し自己制御できるかという教えをどれほど共有しているのかについて論証している。自己制御は物理的・言語的暴力を抑制するのに重要であり、それはイスラームにおいても同様である。
- 4) ヘブライ・カレッジはアンドーバー・ニュートン神学校と発展的關係を築いており、「三宗教間対話」のテーマに両教育機関の教員や学生たちが従事できるよう、相互利益または相互関心のためにユダヤ教とキリスト教が模範となる相互関係になるよう努力している。
- 5) 例えば、私は the Cultural Institute of the Islamic Italian Community の所長である Abdul Hadi Palazzi 教授から以下のような手紙を頂戴した。
「私はあなたが推進しているユダヤ教、キリスト教、イスラームの「三宗教間対話」プロジェクトを非常に評価しています。宗教間対話において、他者に対する敵意の神学的、歴史的、環境的要因に注目することは非常に重要であると思います。それと同時に、互いに争うより相互協力の基盤となる多様性を、相互に理解することを助長できるような現代における方向性を模索することも意義深いと考えます。クルアーンによれば、神は異なった共同体が相互に利益を提供し合い、善行と倫理を学ぶことができるようにそれぞれの信仰の差異を認めています。過去数世紀において、しばしば宗教的指導者たちはこのような使命を裏切り、宗教を敵対関係的で血なまぐさいものにしてしまいました。それゆえ我々の義務は過去の過ちを反省し、神を信仰し、神の神聖なる魂のために、全ての人間に敬意を払わなくてはならないのです。」
- 6) この第2章で言及するいくつかの引用は以下の著書に基づく。Solomon Schimmel, *Wounds Not Healed by Time*.
- 7) Stern, "M. S. Al-Ghazzali, Maimonides, and Ibn Paquda on Repentance: A Comparative Model." *Journal of the American Academy of Religion*, V. 47/4, 1979, 589-907.
- 8) *Ihya Ulum ad-Din* 第31書参照。
- 9) Suha Taji-Farouki in *Muslim-Jewish Encounters: Intellectual Traditions and Modern Politics*. Edited by Ronald Nettle and Suha Taji-Farouki. A Contemporary Construction of the Jews in the Qur'an: A Review of Muhammad Sayyid Tantawi's *Banu Isra'il Fi Al-Qur'an Wa Al-Sunna*, and 'Afif 'Abad Al-Fattah Tabbara's *Al-Yahound Fi Al-Qur'an*.
- 10) Maimonides, Moses. *Mishneh Torah, Book of Knowledge, Laws of Repentance*, Chapter 2, Paragraphs 9.
- 11) Gries, Ze'ev. Heresy. In *Contemporary Jewish Religious Thought*. Edited by Arthur A. Cohen

and Paul Mendes-Flohr. New York: The Free Press, 1987, 339-352 and Izutsu, Toshihiko. *Ethico-Religious Concepts in the Qur'an*. McGill University Institute of Islamic Studies, Montreal: McGill University Press, 1966.

- 12) Taji-Farouki を参照。
- 13) 例を挙げるならば、ユダヤ教とムスリムの指導者や研究者たちは、この京都における神社や寺院で祈る日本人は原理的に偶像崇拝者であるから、死に至らしめるべきだと教えるべきなのだろうか。また、ターリバンがアフガニスタンの仏像を破壊したように、あの三十三間堂の観音像も卑劣な偶像であるため破壊すべきだと教えるべきなのだろうか。
- 14) パレスチナ系アラブ人やイスラエル系ユダヤ人の中には宗教的でない者も存在し、彼等に必ずしも常に神学的見地からの悔い改めまたは赦しを訴えるということは効果的ではない。しかし宗教的価値観や概念はしばしば非宗教的な人々や価値形態に、無意識的または間接的ながらも多大な影響を与える。多くの世俗的ユダヤ人たちは、自分が犯した罪に対して個人的責任を取ること、または社会生活において正義を遵守するという事に非常に重点を置くユダヤ教の教えに賛同している。私は、これと同じようなプロセスがイスラーム的環境で社会化された敬虔でないムスリム、もしくは世俗的なアラブ人、そして表面上または文化的なムスリムの間においても反映されると考えている。
- 15) Gopin, Marc. *Holy War, Holy Peace: How Religion Can Bring Peace to the Middle East*. Oxford University Press, 2002.
- 16) ヘブライ・カレッジは学術文献のコースパックを販売している企業と提携しており、それによって学生が著作権を侵害することなく文献を利用することができる。ただしコースまたはコースパックへのアクセスはパスワードを必要としている。